

- 「畜生（辻小説）」濱田隼雄（「台湾文芸」〈奉〉1-6, 12. 1）
- 「醜敵（辻小説）」新垣宏一（「台湾文芸」〈奉〉1-5, 11. 10）
- 「前夜（辻小説）」通山秀治（「台湾文芸」〈奉〉1-5, 11. 10）
- 「監視臺（辻小説）」小林井津志
- 「デマ（辻小説）」佐藤孝夫（「台湾文芸」〈奉〉1-5, 11. 10）
- 「投石（辻小説）」喜納政明（「台湾文芸」〈奉〉1-5, 11. 10）
- 「ある矛盾（辻小説）」吉村敏（「台湾文芸」〈奉〉1-5, 11. 10）
- 「空爆と白金（辻小説）」鶴丸詩光（「台湾文芸」〈奉〉1-5, 11. 10）
- 「十月十二日（辻小説）」河野慶彦（「台湾文芸」〈奉〉1-5, 11. 10）
- 「臺灣縦貫鐵道⑧白鷺の章（小説）」西川満（「台湾文芸」〈奉〉1-5, 11. 10）

- 「草創（長篇小説第四回）」濱田隼雄
（「文芸台湾」6-5, 9. 1）
- 「臺灣縦貫鐵道④白鷺の章（小説）」
西川満（「文芸台湾」6-6, 11. 1）
- 「加代の結婚（小説）」河原光廣（「文
芸台湾」6-6, 11. 1）
- 「夢像の部屋（小説）」日野原康史
（「文芸台湾」6-6, 11. 1）
- 「小豆飯（小説）」徳澄人（「文芸台湾」
6-6, 11. 1）
- 「弟の四郎」小林井津志（「文芸台湾」
6-6, 11. 1）
- 「落磐（小説）」土井はる（「文芸台湾」
6-6, 11. 1）
- 「赤城山埋藏金（小説）」宮崎端（「文
芸台湾」6-6, 11. 1）
- 「鐵樹（小説）」相澤誠（「文芸台湾」
6-6, 11. 1）
- 「扁柏の蔭（小説）」河野慶彦（「文芸
台湾」6-6, 11. 1）
- 「草創（長篇小説第五回）」濱田隼雄
（「文芸台湾」6-6, 11. 1）
- 「床母（二幕戯曲）」吉村敏（「台湾文
学」4-1, 12. 25）
- 「盂蘭盆（創作）」坂口榛子（「台湾文
学」4-1, 12. 25）
- 「父に似た人（創作）」黒石猛（「台湾
文学」4-1, 12. 25）
- ★昭和十九年（一九四四）
- 「臺灣縦貫鐵道⑤白鷺の章（小説）」
西川満（「文芸台湾」7-2, 1. 1）
- 「とんぼ玉（小説）」河野慶彦（「文芸
台湾」7-2, 1. 1）
- 「断崖（小説）」土井はる（「文芸台湾」
7-2, 1. 1）
- 「家（一幕戯曲）」竹内治（「文芸台湾」
7-2, 1. 1）
- 「砂塵（小説）」新垣宏一（「文芸台湾」
7-2, 1. 1）
- 「草創（長篇小説第六回）」濱田隼雄
（「文芸台湾」7-2, 1. 1）
- 「墓前報告（小説）」神川清（「台湾文
芸」＜奉＞1-1, 5. 1）
- 「草創（長篇小説第七回）」濱田隼雄
（「台湾文芸」＜奉＞1-1, 5. 1）
- 「臺灣縦貫鐵道⑥白鷺の章（小説）」
西川満（「台湾文芸」＜奉＞1-1, 5. 1）
- 「十二月九日（小説）」川崎傳二（「台
湾文芸」＜奉＞1-2, 6. 14）
- 「臺灣縦貫鐵道⑦白鷺の章（小説）」
西川満（「台湾文芸」＜奉＞1-2, 6. 14）
- 「草創（長篇小説第八回）」濱田隼雄
（「台湾文芸」＜奉＞1-2, 6. 14）
- 「隣人（小説）」坂口榛子（「台湾文芸」
＜奉＞1-3, 7. 1）
- 「舟渠（小説・情報課委嘱作品）」新
垣宏一（「台湾文芸」＜奉＞1-5,
11. 10）
- 「鑿井工（小説・情報課委嘱作品）」
河野慶彦（「台湾文芸」＜奉＞1-5, 11.
10）
- 「蓖麻は伸びる（小説）」小林井津志
（「台湾文芸」＜奉＞1-5, 11. 10）

- 「轉勤（小説）」大河原光廣（「文芸台湾」5-4, 2.1）
- 「栗（戯曲一幕二場）」相澤誠（「文芸台湾」5-5, 3.1）
- 「舞臺裏（戯曲一幕）」小林洋（「文芸台湾」5-5, 3.1）
- 「牛のゐる村（小説）」西川満（「文芸台湾」5-6, 4.1）
- 「流れ（小説）」河野慶彦（「文芸台湾」5-6, 4.1）
- 「山の火（小説）」新垣宏一（「文芸台湾」5-6, 4.1）
- 「家のない家主（小説）」川合三良（「文芸台湾」5-6, 4.1）
- 「草創（長篇小説一）」濱田隼雄（「文芸台湾」5-6, 4.1）
- 「灯（創作）」坂口榛子（「台湾文学」3-2, 4.28）
- 「高砂館（一幕戯曲）」林博秋（「台湾文学」3-2, 4.28）
- 「心象（創作）」野田康男（「台湾文学」3-2, 4.28）
- 「敵愾心（創作）」吉村敏（「台湾文学」3-2, 4.28）
- 「眼（辻小説）」河野慶彦（「文芸台湾」6-2, 6.1）
- 「浚渫船（辻小説）」今田喜翁（「文芸台湾」6-2, 6.1）
- 「若い水兵（辻小説）」新垣宏一（「文芸台湾」6-2, 6.1）
- 「死生（辻小説）」西川満（「文芸台湾」6-2, 6.1）
- 「地圖（辻小説）」大河原光廣（「文芸台湾」6-2, 6.1）
- 「雨はれて（辻小説）」中島俊男（「文芸台湾」6-2, 6.1）
- 「娘の圖（辻小説）」濱田隼雄（「文芸台湾」6-2, 6.1）
- 「ある一座（小説）」新田淳（「文芸台湾」6-2, 6.1）
- 「臺灣縦貫鐵道①白鷺の章（小説）」西川満（「文芸台湾」6-3, 7.1）
- 「湯わかし（小説）」河野慶彦（「文芸台湾」6-3, 7.1）
- 「草創（長篇小説第二回）」濱田隼雄（「文芸台湾」6-3, 7.1）
- 「曙光（小説）」坂口榛子（「台湾文学」3-3, 7.31）
- 「臺灣縦貫鐵道②白鷺の章（小説）」西川満（「文芸台湾」6-4, 8.1）
- 「再生（辻小説）」今田喜翁（「文芸台湾」6-4, 8.1）
- 「濱の子供（辻小説）」小林井津志（「文芸台湾」6-4, 8.1）
- 「海（辻小説）」相澤誠（「文芸台湾」6-4, 8.1）
- 「草創（長篇小説第三回）」濱田隼雄（「文芸台湾」6-4, 8.1）
- 「臺灣縦貫鐵道③白鷺の章（小説）」西川満（「文芸台湾」6-5, 9.1）
- 「海ほほづき（小説）」徳澄人（「文芸台湾」6-5, 9.1）
- 「繪のある葉書（辻小説）」大河原光廣（「文芸台湾」6-5, 9.1）

- 「女心秋空（創作）」山川不二人（「台湾文学」2-2, 3. 30）
- 「客間（三幕戯曲）」中山侑（「台湾文学」2-2, 3. 30）
- 「盛り場にて（小説）」新垣宏一（「文芸台湾」4-1, 4. 20）
- 「南方移民村（七）」濱田隼雄（「文芸台湾」4-1, 4. 20）
- 「採硫記<中篇>」西川満（「文芸台湾」4-1, 4. 20）
- 「一つの縮圖（小説）」川合三良（「文芸台湾」4-2, 5. 20）
- 「南方移民村（八）」濱田隼雄（「文芸台湾」4-2, 5. 20）
- 「採硫記<下篇>」西川満（「文芸台湾」4-2, 5. 20）
- 「南方移民村（九）」濱田隼雄（「文芸台湾」4-3, 6. 20）
- 「臺北②（連作小説）」川合三良（「文芸台湾」4-3, 6. 20）
- 「微涼（創作）」坂口禰子（「台湾文学」2-3, 7. 11）
- 「弔旗中空に高く（創作）」山川不二人（「台湾文学」2-3, 7. 11）
- 「家主と経緯（創作）」名和榮一（「台湾文学」2-3, 7. 11）
- 「盤石丸（小説）」村田義清（「文芸台湾」4-4, 7. 20）
- 「石男（小説）」小林井津志（「文芸台湾」4-4, 7. 20）
- 「苦力——臺鐵廣東派遣員手記（小説）」蔭山満美（「文芸台湾」4-4, 7. 20）
- 「臺北③（連作小説）」新田淳（「文芸台湾」4-4, 7. 20）
- 「技師八田氏についての覺書（短篇小説）」濱田隼雄（「文芸台湾」4-6, 9. 20）[現在所見の復刻本ではP25～P27が白紙となっている]
- 「襤褸（短篇小説）」川合三良（「文芸台湾」4-6, 9. 20）
- 「龍脈記（短篇小説）」西川満（「文芸台湾」4-6, 9. 20）
- 「職域奉公論（創作）」山川不二人（「台湾文学」2-4, 10. 19）
- 「遅かなる母に（創作）」名和榮一（「台湾文学」2-4, 10. 19）
- 「天竺の死（創作）」石津隆（「台湾文学」2-4, 10. 19）
- 「流れる雲（三幕戯曲）」中山侑（「台湾文学」2-4, 10. 19）
- 「甘井君の私小説」濱田隼雄（「文芸台湾」5-1, 10. 20）
- 「康吉と増子（小説）」川合三良（「文芸台湾」5-3, 12. 20）
- 「訂盟（小説）」新垣宏一（「文芸台湾」5-3, 12. 20）
- ★昭和十八年（一九四三）
- 「食老（創作）」和田漢（「台湾文学」3-1, 1. 31）
- 「墓標を捜す女（創作）」折井敏雄（「台湾文学」3-1, 1. 31）
- 「午後の雨（一幕戯曲）」中山侑（「台湾文学」3-1, 1. 31）

- 台湾」2-3, 6. 20)
- 「或る時期（小説）」川合三良（「文芸台湾」2-4, 7. 20)
 - 「ふるさと寒く（小説）」亀田恵美子（「文芸台湾」2-4, 7. 20)
 - 「芭蕉畑（小説）（後編）」新田淳（「文芸台湾」2-4, 7. 20)
 - 「牢屋（戯曲）」竹内治（「文芸台湾」2-5, 8. 20)
 - 「海口印象記（創作）」紺谷淑藻郎（「台湾文学」1-2, 9. 1)
 - 「煽地（第二回）」名和榮一（「台湾文学」1-2, 9. 1)
 - 「出生（小説）」川合三良（「文芸台湾」2-6, 9. 20)
 - 「南方移民村（一）（長編小説）」濱田隼雄（「文芸台湾」3-1, 10. 20)
 - 「五號室（小説）」日野原康史（「文芸台湾」3-1, 10. 20)
 - 「浪漫（小説）」西川満（「文芸台湾」3-2, 11. 20)
 - 「南方移民村（二）」濱田隼雄（「文芸台湾」3-2, 11. 20)
 - 「南方移民村（三）」濱田隼雄（「文芸台湾」3-3, 12. 20)
- ★昭和十七年（一九四二）
- 「朱氏記（小説）」西川満（「文芸台湾」3-4, 1. 20)
 - 「阿里山通信（小説）」日野原康史（「文芸台湾」3-4, 1. 20)
 - 「元日の挿話（小説）」新田淳（「文芸台湾」3-4, 1. 20)
 - 「城門（小説）」新垣宏一（「文芸台湾」3-4, 1. 20)
 - 「婚約（小説）」川合三良（「文芸台湾」3-4, 1. 20)
 - 「南方移民村（四）」濱田隼雄（「文芸台湾」3-4, 1. 20)
 - 「時計草（創作）」坂口禰子（「台湾文学」2-1, 2. 1）[当局の命により削除された]
 - 「蠨螂歌（創作）」山川不二人（「台湾文学」2-1, 2. 1)
 - 「寄港に一夜（創作）」中山ちゑ（「台湾文学」2-1, 2. 1)
 - 「煽地」名和榮一（「台湾文学」2-1, 2. 1)
 - 「客間（三幕戯曲）」中山侑（「台湾文学」2-1, 2. 1)
 - 「城門開く（戯曲）」西川満（「文芸台湾」3-5, 2. 20)
 - 「鶏（戯曲）」竹内治（「文芸台湾」3-5, 2. 20)
 - 「十二月八日（戯曲）」日野原康史（「文芸台湾」3-5, 2. 20)
 - 「義人頼順長（戯曲）」長崎浩（「文芸台湾」3-5, 2. 20)
 - 「南方移民村（五）」濱田隼雄（「文芸台湾」3-5, 2. 20)
 - 「南方移民村（六）」濱田隼雄（「文芸台湾」3-6, 3. 20)
 - 「採硫記<發端篇>（小説）」西川満（「文芸台湾」3-6, 3. 20)

- 「靴（小説）」佐賀久男（「台湾新文学」1-4, 5. 4）
- 「女と女（創作）」谷孫吉（「台湾文芸」〈聯〉3-6, 5. 29）
- 「盲目（小説）」佐賀久男（「台湾新文学」1-5, 6. 5）
- 「生きる（小説）」英文夫（「台湾新文学」1-6, 7. 7）
- 「夜明け前（一幕戯曲）」太田孝（「台湾新文学」1-6, 7. 7）
- 「野村屋（創作）」英文子（「台湾文芸」〈聯〉3-7・8, 8. 28）
- 「あたしのあなた（第一部）（戯曲）」瀧坂陽之助（「台湾文芸」〈聯〉3-7・8, 8. 28）
- 「曙光（創作）」英文夫（「台湾新文学」1-9, 11. 5）
- 「出奔（創作）」佐賀久男（「台湾新文学」1-10, この号発行禁止処分により発行月日なし）
- 「ホグロ（創作）」母里行榮（「台湾新文学」2-1, 12. 28）
- 「妹（創作）」増田正俊（「台湾新文学」2-1, 12. 28）
- ★昭和十五年（一九四〇）
- 「鼓浪嶼（コロンス）のレンズ」中山侑（「文芸台湾」1-1, 1. 1）
- 「稻江治春詞（創作）」西川満（「文芸台湾」1-1, 1. 1）
- 「呉れ好き貰ひ好き」林熊生〈金関丈夫〉（「文芸台湾」1-2, 3. 1）
- 「病牀日記」濱田隼雄（「文芸台湾」1-2, 3. 1）
- 「横丁之圖」濱田隼雄（「文芸台湾」1-4, 7. 10）
- 「横丁の圖（後編）」濱田隼雄（「文芸台湾」1-5, 10. 1）
- 「海邊にて」日野原康史（「文芸台湾」1-5, 10. 1）
- 「芝山巖」北原政吉（「文芸台湾」1-5, 10. 1）
- 「犬」新田淳（「文芸台湾」1-5, 10. 1）
- 「赤嵌記（小説）」西川満（「文芸台湾」1-6, 12. 10）
- ★昭和十六年（一九四一）
- 「公園の圖（小説）」濱田隼雄（「文芸台湾」2-1, 3. 1）
- 「雲林記（小説）」西川満（「文芸台湾」2-1, 3. 1）
- 「轉校（小説）」川合三良（「文芸台湾」2-2, 5. 20）
- 「河のほとり（小説）」日野原康史（「文芸台湾」2-2, 5. 20）
- 「ある抗議（創作）」中山侑（「台湾文学」1-1, 5. 26）
- 「煽地（創作）」名和榮一（「台湾文学」1-1, 5. 26）
- 「再出発（創作）」多田均（「台湾文学」1-1, 5. 26）
- 「芭蕉畑（小説）」新田淳（「文芸台湾」2-3, 6. 20）
- 「盗難之圖（小説）」濱田隼雄（「文芸

【凡 例】

- 1 本目録は、日本統治下の台湾において発行された文芸雑誌「台湾文芸」（台湾文芸聯盟＝＜聯＞）、「台湾新文学」、「文芸台湾」、「台湾文芸」（台湾文学奉公会＝＜奉＞）各誌上に日本人が発表した作品を年度に分けて配列したものである。（但し、1981年3月台湾・東方文化書局「景印中国期刊五十種」の一種として景印出版された「新文学雑誌叢刊」所収版によった。「目録」の中では「復刻本」と略記）
- 2 発表作品は、「小説」（辻小説を含む）と「戯曲」に限った。
- 3 著者の後の（ ）内は、掲載誌、巻号、月日の順である。

☆☆☆

★昭和九年（一九三四）

- 「横戀慕（戯曲）」保坂瀧雄（「台湾文芸」＜聯＞2-1, 12, 18）

★昭和十年（二九三五）

- 「生きんとするものゝ聲（一幕戯曲）」保坂瀧雄（「台湾文芸」＜聯＞2-2, 2, 1）
- 「荊棘の道」光明静夫（「台湾文芸」＜聯＞2-1, 2, 18）
- 「泥沼（短篇小説）」母里行榮（「台湾文芸」＜聯＞2-3, 3, 15）
- 「夫婦（創作）」英文夫（「台湾文芸」

＜聯＞2-4, 4, 1）

- 「おばあさんと指輪（創作）」谷孫吉（「台湾文芸」＜聯＞2-4, 4, 1）
 - 「訣別（上）（創作）」新垣光一（「台湾文芸」＜聯＞2-6, 6, 10）
 - 「奥さんと音楽會（創作）」谷孫吉（「台湾文芸」＜聯＞2-6, 6, 10）
 - 「歪められた男（小説）」谷孫吉（「台湾文芸」＜聯＞2-7, 7, 1）
 - 「訣別（中）（小説）」新垣光一（「台湾文芸」＜聯＞2-7, 7, 1）
 - 「手紙（小説）」谷孫吉（「台湾文芸」＜聯＞2-8・9, 8, 4）
 - 「噂（小説）」瀧坂陽之助（「台湾文芸」＜聯＞2-8・9, 8, 4）
 - 「戀愛流線型（ユーモア小説）」鶴丸耿之介（「台湾文芸」＜聯＞2-8・9, 8, 4）
 - 「安平城異聞（一幕戯曲）」赤星正徳（「台湾文芸」＜聯＞2-10, 9, 24）
- ★昭和十一年（一九三六）
- 「見参（小説）」谷孫吉（「台湾新文学」1-2, 3, 3）
 - 「泥沼（長編小説第一回）」峰村毅（「台湾新文学」1-2, 3, 3）
 - 「泥沼（長編小説第二回）」峰村毅（「台湾新文学」1-3, 4, 1）
 - 「蠅（創作）」英文夫（「台湾文芸」＜聯＞3-4・5, 4, 20）
 - 「屈辱（創作）」藤田三一（「台湾文芸」＜聯＞3-4・5, 4, 20）

作家たちは日本語で執筆するか、あるいは筆を折るかの選択を迫られた。そして中国語使用禁止と相前後して日本人作家の創作が雑誌や新聞紙上を飾るようになっていった（日本人作家の台湾文壇への本格的な登場は一九三五年〈昭和10〉頃から始まる）。さらに、一九四〇年に西川満が『文芸台湾』を発行してからは台湾文芸の担い手は台湾人から日本人へ移ってしまった感がある。

近年来、台湾・中国大陆そして日本において台湾文学の研究がさかんになって来た。しかし、当然のことではあるが台湾や大陸においては日本人作家についての研究はほとんどないといってよい。自国を植民地にし、また侵略した国の作家たちの作品に意味を求めることは、とりもなおさずその植民地化あるいは侵略を肯定することになる。ゆえに作品の復刻も行われず、また研究も行われていない。事情は、日本でもほぼ同様である。終戦後、台湾から帰国した彼らの多くは創作活動を断つか、あるいは続けてもほとんど注目を浴びることもなかった。日本文学史にも台湾文学史にも詳しく記述されることはなく、忘れ去られたといってよいだろう。日本人作家の作品は台湾文芸界に咲いた徒花であったかもしれない。しかし、かれらが台湾という土地で生活し、そこで作品を書き発表したことは事実である。かれらが自分の作品にいったい何を託したのか、それは統治者の目を見た台湾であったかもしれないが、その特異な立場をかれらの作品の中から知りたいと思う。そして、これは統治者であった日本人にしかできないことである。本目録は、それら「忘れられた作家たち」作品の一端を知りたくて編んだ基礎作業である。

なお、本目録収録誌以外にもおそらく多くの雑誌（たとえば、1931. 8から翌年にかけて発行された、別所孝二編『台湾文学』など）や新聞類（『台湾日日報』など）に日本人作家の作品が掲載されたと思われるが、現在ではほとんど完全には見ることができないため目録に組入れることができなかった。また、当時刊行された日本人作家の単行本作品には、西川満『梨花夫人』（s 15）、『赤嵌記』（s 17）、『桃園の客』（s 18）、濱田隼雄『南方移民村』（s 17）、『草創』（s 19）、坂口禰子『鄭一家』（s 18）、『曙光』（s 18）などがあるが、これも一部を除いて未見のため省いた。ともに今後の資料探索の課題である。

尚、本稿は聖徳学園岐阜教育大学1991年度研究助成金の成果の一部である。

忘れられた作家たち <資料編>

日本統治下台湾発行文芸雑誌所収日本人作家目録（稿）

中 島 利 郎

〔解説〕

一八九五年（明治28・光緒21）四月、日清戦争（甲午中日戦争）後の日清講和条約の結果、台湾は清朝より割譲され日本の植民地となった。しかし、日本政府の植民地統治は一朝一夕にはいかなかった。割譲後の翌日から台湾人たちの抗日運動は始まった。五月には、唐景崧を総統とする「台湾民主国」独立宣言があり、それに各地が呼応して進駐した日本軍に抵抗し、日本政府はそれらを鎮圧するのに五ヶ月もかかった。その後も台東の劉徳均や雲林の簡義の抗日拳兵、北埔事件（1907）、林杞埔事件（1912）、羅福星を中心とする苗栗事件（1913）等々の抗日事件が起り、一九一五年（大正4）に台南のタバニで起った、いわゆる西来庵事件まで続いた。西来庵事件後、一九三一年の「霧社事件」を除けば、台湾における武力での抗日は終りをつげたといえる。しかし、台湾における抗日運動はそれで終わってしまったわけではなく、台湾議会設置運動や差別支配の根源である「六三法」撤廃運動、および台湾文化協会結成などの政治文化運動にかたちをかえたのである。そして、これらの政治運動や文化運動の言論の場として新聞や雑誌が発行されるようになった。たとえば、一九二〇年（大正9）七月には『台湾青年』が、林献堂が会長をつとめる政治団体「新民会」及びその下部組織である「台湾青年会」の機関誌として発行されたが、これは後に『台湾』、『台湾民報』、『台湾新民報』として発展し、日本統治下の唯一の台湾人の言論誌としての役割をになった。そして、台湾における文芸創作活動の萌芽は、この『台湾』及び『台湾民報』から始まる。

台湾における文芸活動は一九二三年頃から始まる。この頃になって大陸の白話運動や新文学運動の紹介が『台湾民報』などに掲載され、引続き張我軍や楊雲萍が創作を発表したが、三〇年代に入ると台湾芸術研究会、台湾文芸協会、台湾文芸聯盟などの文芸団体が次々と結成され、それらの機関誌として『フォルモサ』、『先発部隊』、『台湾文芸』などが発行された。また、この期には頼和、楊達、王錦江など日本植民地下の代表的台湾人作家が活躍した。ところが、一九三七年四月、日本政府は台湾発行の雑誌や新聞紙上における中国語の使用を禁止した。そのために、中国語で執筆活動をしてきた多くの